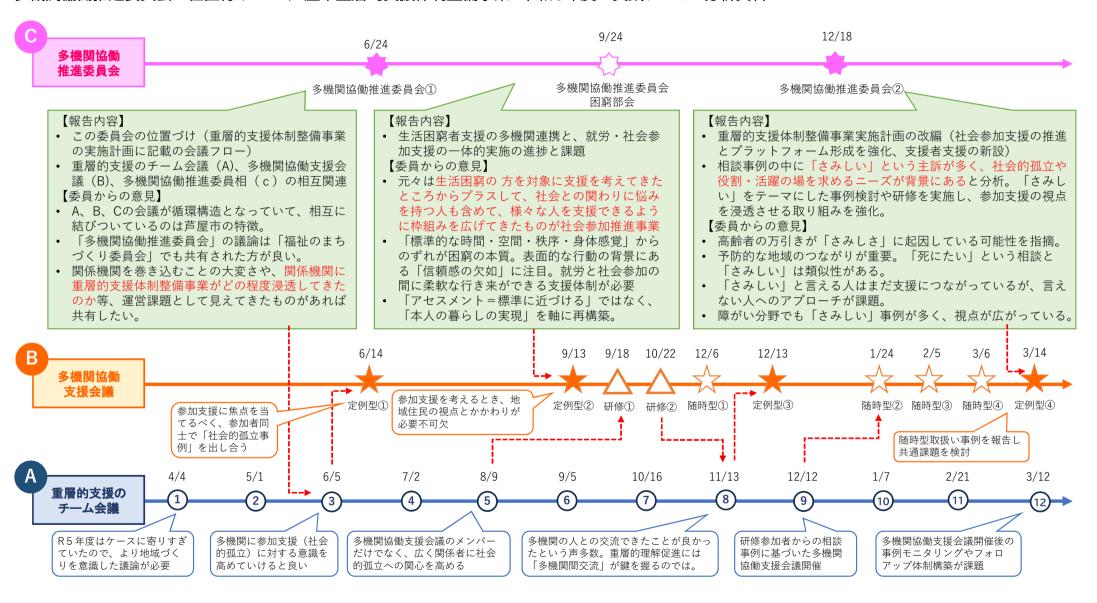
多機関協働推進委員会の位置付け < 芦屋市重層的支援体制整備事業 令和6年度の実践プロセス分析資料 >



令和6年度の各会議体での取組と課題

В

多機関協働支援会議

【現状】

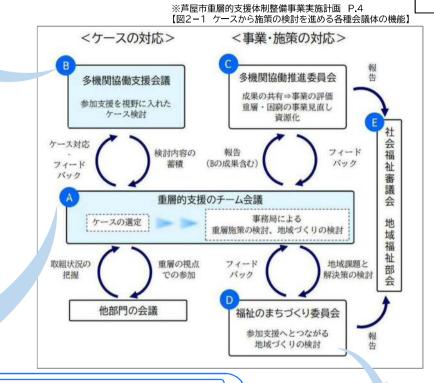
- ■定例型(3か月に1回の定例開催)
- ・参加者から「社会的孤立だったかも知れない事例」を挙げてもらい、その事例の参加支援を検討。
- ■随時型(ケースに応じて随時開催)
- ・4件開催(キャバクラ依存、上階の騒音、認知症の方の参加支援、外国にルーツのある子どもの学習支援)

【令和6年度の取組】

- ・随時型4件のうち2件は、9月・10月に開催した研修会参加者からの相談事例を検討。
- ・R6年度から新たに芦屋市社会福祉法人連絡協議会(ほっとかへんネットあしや)のメンバーが参加。
- ・多機関協働支援会議に参加したメンバーから「事例のその後について知りたい」という声があがり、3月の多機関協働支援会議で報告。よりタイムリーな情報共有が課題。

【今後の取組予定】

3か月に1回の定例型をエリアごとに開催。新たに各エリアの高齢者生活支援センターや地域支え合い推進員、ほっとかへんネットあしやなどが参加予定。



重展的士摇

重層的支援のチーム会議

【現状】原則1回/月の頻度で定例開催。

ケースの選定

【令和6年度の取組】

- ・全14件(新規7件・R5継続7件)のケースを検討。 うち5件を多機関協働支援会議へ展開し検討(随時型:4件、 定例型:1件)。
- ・事業の理解促進、多機関協働相談窓口の周知、社会的孤立への関心向上を意図して研修会開催(2回/年)

----- 重層施策の検討、地域づくりの検討

【課題】

・個別ケースへの支援をとおしての地域課題化は、非常に高度な 技術が要求される上、断片的な課題に留まるため、ケースの蓄積 だけではない課題化するための検討が必要。

【今後の方向性】

- ・エリア性を考慮し、多機関が捉えている課題、地域住民が把握している課題を、統合することが必要。また、具体的な参加支援を考えるために地域住民(福祉活動者)と専門機関の協働が必要。
- ・そのためには、まず、専門機関と地域住民(福祉活動者)が出会い、相互に交流する機会を設ける。

D 福祉のまちづくり委員会

【改編】

・R6から、より地域づくりについて意見交換ができるよう、地域の活動者や、高齢者、障がいのある人などの当事者を委員に委嘱

【協議内容】

- ・構成員の活動共有とともに、活動主体間の協働促進を意図したディスカッションを実施。
- ・多機関協働推進委員会の協議内容を共有

令和7年1月~5月までの取組ダイジェスト

※令和6年度第2回多機関協働推進委員会のその後~現在まで

重層研修「春の重層まつり」

包括的相談支援 多機関協働

重層の基本理解と顔のみえる関係づくり



- ・関係機関、行政あわせて53名が参加
- ・新年度の研修ということもあり、①基本的な理念や改定後実施計画の説明、②多機関協働支援会議での検討事例の紹介、③芦屋市の包括的な支援体制構築に向けた取組をマンダラチャートでアイデアだし。

参加支援

【成果】

- ・重層の理解(何をめざして、どんなことに取り組み、どんな手応えがあったのか、自分の業務にどうかかわるのか)
- ・多機関協働相談窓口の周知(どんなケースの相談ができるのか、どこに相談すればいいのか)
- ・多機関協働の必要性の理解や顔の見える関係づくり (「つながり」「連携」というワードが出た)

地域づくり支援

→参加者も多く、年度初めに理念理解+関係づくりもできるので、来年度以降も4月に実施(固定)することを決定

多機関協働 と参加支援 の推進

多機関協働支援会議(3/14定例型)

制度福祉では届かない「さみしさ」(参加支援) に取り組んできた1年を振り返り

- ・トークテーマ:多機関協働支援会議は何をもたらしたか? 【成果】
- ・社会参加や地域づくりの視点で、制度にこだわらず本人の生活を中心に支援を考えられるようになった。
- ・多機関協働の必要性の理解や顔の見える関係づくりにつながった。

多機関協働による 参加支援の意識の広がり ↓ 社会参加の場はどうなっ ているんだろう?

社会参加推進事業のレシピ化(4月~6月)

個別支援重視から参加支援重視への プロセスをたどる

- ・一体的に実施している「重層の社会参加推進事業」と「生活困窮者自立支援制度の就労準備支援 事業」の評価に向け、一体的実施を料理に例えレ シピを作成。
- ・料理の材料、料理のコツ、その背景を試行錯誤し、 4つのレシピを作成予定。レシピ作成を通して、事 業を振り返ることで、評価につなげていく。